

2025年11月2日 1コリント13：1－13

説教題 「最も大いなるもの」

【今日の説教から】

庄原にランバス宣教師が来られてから140年。それから10年を経て、宣教師のもとに洗礼を受けた教会員が誕生し、教会が成長し、吉舎、油木、東城など県北へと拡大していきました。私たちは今、庄原教会の130周年を祝うとともに、いつまでも変わらないものに、しかと目を向けたいと思います。いつまでも存続するもの、それは愛です。

「預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰」があつたら私たちの人生も教会の未来も安泰であると言えるでしょうか。しかし、「預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれる」のです。「わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない」のです。

「今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。…その時には、顔と顔とを合わせて、見る…。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。…その時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。」

わたしが御使いの言葉を話したとしても、わたしに預言する力があつたとしても、わたしに強い信仰や、犠牲的な行動があつたとしても、それらは不完全です。古い時代のくぐもった鏡で顔を見るようなものです。子供の時代に幼稚に考えていたことを捨て去った大人のように、私たちは完全なものを知ることが出来るのです。それが神の愛です。愛してくださる神様に目を留めるのです。

皆様おはようございます。

めっきり寒くなりました朝晩の天候ですが、お元気にお過ごしでしたでしょうか。時折みられます秋の青空と温かい日差しが本当に貴重なこの頃ですね。ぜひぜひご自愛ください。

今日は庄原教会の創立130周年記念の時を迎えております。

《教会の130年・宣教の歩み》

- ◆ (前史)1885年 J.W.ランバス宣教師  
開校された庄原英学校の教師を務める
- ◆ 1887年 ランバス宣教師一度神戸に行かれたが  
庄原に戻り宣教を開始
- ◆ 1893年 T・W・ギュリック師、三次町に赴き  
伝道を開始。H・リンドストローム師夫妻へ引継

- ◆ 梶原勝蔵氏は路傍伝道に触発され、三次までミス・バーンズ宣教師を訪問 キリストを信じる
- ◆ 1896 年梶原勝蔵氏洗礼を受ける。(教会の初穂)
- ◆ 庄原町胡子町の渡邊玄丹氏所有の借家にて集会を始める。
- ◆ ミス・バーンズ師と並行し堀江儀作氏が聖書研究会をし、後に広島教会の初代牧師となる。
- ◆ 1912 年 ミス・フランシス宣教師、広島から庄原に移り伝道。ミス・ワイリー宣教師、宣教をともにする。弟ミスター・フランシス師協力。庄原を拠点にし、吉舎、東城、油木等、県北を歩いて伝道した。
- ◆ 1940 年 松山静師 庄原に着任。
- ◆ 1957 年 庄原教会教会堂献堂式
- ◆ 1961 年 S・ディック宣教師、庄原にて協力伝道

ざっと宣教師の先生方、草創期の牧師の方々の流れを見るとこのような感じですが、実に多くの方々の祈りとご奉仕によってこの庄原と県北への伝道が、これまで長きにわたってなされてきたことを思うのです。

今日の御言葉に、こういう言葉がありました。

「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。」

私達もまた、このいつまでも存続するものによって支えられて生きています。最も大いなるものに支えられて生きています。このことのために宣教師の方々は実に明治の時代に長い長い船旅をして、遠い未開発の国に宣教に来てくださいました。そのスピリットのゆえに、その愛と情熱のゆえに私たちは今ここにいます。ここに変わらない、神様の教会があります。私たちは今日、この歴史の一区切りの時、少し歩みを止めて、いつまでも存続するもの、いつまでも残るもの、そしてそのいつまでも残るものの中でさらに最も優れたものについて御言葉から教えられたいと願っております。

13:1 たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい饒鉢と同じである。

13:2 たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等し

い。

13:3 たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。

この数節で目に留まるのは、「わたしは」とは、「わたしが」という繰り返される言葉です。

人々の言葉や御使たちの言葉を語る、素晴らしいことです。すごいことです。

預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じている、本当にすごいことです。預言する力。これは「神のメッセージを宣べ伝えるための賜物・天からの才能」とあり、8節にも「預言」という言葉として登場しますが、「神のメッセージを宣べ伝えるための賜物・天からの才能」などという言葉を見ましたら、私は牧師としましてはそれはいわゆるよだれが出るような、垂涎の賜物であるわけです。

その上にあらゆる億義とあらゆる知識とに通じているのですから、最強というべきほかはありません。「人々の言葉」とは、異言を指す言葉ですし、その上天使の言葉さえもマスターし、知識に長け、語るに長け、奥義に長け…。なんとも無敵な感じがいたします。そしてその上「山を移すほどの強い信仰」があるとは、確かにイエス様も疑わずに信じれば山をも動かせるとおっしゃったわけです。

マルコ 11:22 イエスは答えて言われた、「神を信じなさい。

11:23 よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。

11:24 そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでになえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりに成るであろう。

さらにさらに、「たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても」・・・と書いてあります。能力にも、知識にも、信仰にも、行いにも完全と思われるこの人、しかし聖書はそれでも愛を欠いては無に等しいと語るのです。どういう事でしょうか。何と厳しいのでしょうか。そこまでも完璧を期した素晴らしい信仰者、素晴らしい教役者でありながら、どうして責められなければならないのでしょうか。

そこでやはり「わたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。 たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても」…という言葉の中の「わた

しが」という言葉が気にかかるのです。

3節の、「自分のからだを焼かれるために渡しても」、という言葉は、ギリシャ語では「自慢や誇りのために自分のからだを差し出して渡す」という意味にも取れないこともない単語が書いてあります。自分の誇りのために死ぬという事、死んでしまっただけは何にもならないと思うのですが、そこには日本人にとっての切腹の美学のようなものがあるのかもしれませんが。いずれにしても、完璧に見えるようで実はそうではない、人が最高レベルに、いや最高というよりも不可能を可能にしたような人間の到達する極限のレベルのことがここに記されているのだと思うのです。しかしそうであっても、愛がないのなら全く無意味だということです。それではその愛とは何なのでしょう。

13:4 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。

13:5 不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。

13:6 不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

13:7 そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

13:8 愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。

13:9 なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。

こういう愛に裏打ちされているのなら、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、尊いのであって、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じではなく、無に等しくも、いっさいは無益であるという事にはならないということです。愛無くしてもそれらの徳のあるようなことが出来るという事にはいささか驚きを感じます。これら人のなす偉大な業、ものすごく価値があると思われていたことが、「やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じ、無に等しく、いっさいは無益」と言われていることに驚きを覚えます。

イエス様が語られた次の言葉が思い浮かびます。

マタイ 7:21 わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。

7:22 その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

7:23 そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。

7:24 それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。

7:25 雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。

7:26 また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。

7:27 雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである」。

7:28 イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆はその教にひどく驚いた。

7:29 それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように、教えられたからである。

イエス様に不遜な態度で接し、決して心に向かえなかった祭司長、祭司、律法学者たちのように、ダマスコ途上のサウロのように、彼らは自分が正しいという事に一縷の疑いをも持っていないでいました。その「私は正しい」「私はこんなに理解し、語ることが出来、こんなにも上手に神のメッセージを解き明かすことができ、あらゆることに通じていて、強い信仰を持ち、驚くような立派な、自己犠牲を伴った存在」と思うこと、それがどこか根本的な誤りを含んでいるという事を聖書は語っています。

見ているようで見ていない、聞いているようで聞いてはいないのです。

マタイ 13:10 それから、弟子たちがイエスに近寄ってきて言った、「なぜ、彼らに譬でお話しになるのですか」。

13:11 そこでイエスは答えて言われた、「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていない。

13:12 おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。

13:13 だから、彼らには譬で語るのである。それは彼らが、見ても見ず、聞いても聞かず、また悟らないからである。

13:14 こうしてイザヤの言った預言が、彼らの上に成就したのである。『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。

13:15 この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである』。

13:16 しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。

律法学者たちは驚くほど知っているようで知っていない。弟子たちは無学なのに知ってい

る。その違いは何なのでしょう。

13:4 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。

13:5 不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。

13:6 不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

13:7 そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

13:8 愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。

13:9 なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。

私たちはイエス様と出会ったからすべてが分かるようになったのです。それまでは、私たちは自分が頑張れば、正しいと認められると信じて頑張っていました。完璧になれると信じて律法を守ることに専念して、捧げものも捧げていました。そこに何か落ち度があれば救われないという心を持って、道から落ちないようにと人類は必死に頑張ってきたのです。「寛容で情深く、ねたまず、高ぶらず、誇らず、不作法をせず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みをいだかない、不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」、こういう生き方を目指し、その教師たちが祭司長であり律法学者でしたが、彼らの正しさは外側だけで、その偽善は明らかでした。悲しいかな、人間のなすこととは、限界があるのです。指導者たちが最初から不埒な偽善者であったわけはありません。彼らは知り、学び、自分を律したに違いありません。しかしそれには際限がないのです。おびたしいおきてを全て守り行うことなど、人間にはできないのです。それではどうして守ることも出来ないようなおきてを神様はその民に課されたのでしょうか。神様のおきてが人間にはやり切れるものではない。それゆえに神様は非情であって不条理であってインチキだと私たちは思うかもしれません。しかし私たちが神様がそのおきてをどのように定めるべきかを命令する筋合いにあるわけではありません。神様は何でもご自身の思いで決めることが出来ます。

それを守れないのは、ただただ私たちの非力と不甲斐なさのせいなのです。それはだからと言っておきてが難しすぎると私たちが神様に非難や苦情を述べ立てるためではなくて、私たちが素直になって、くずおれて、私たちの非を認め、どうしようもなく不出来な存在であることを認めるために律法は存在するのです。なんだ、最初からできないと分かってルールを決めて、できないからごめんなさいと言わせるがために難しいルールを決めるなんて、卑怯だ、ルール違反だ、せこい、などと怒ることはできません。それは出来ない私たちを神様

はどのように処するのかを見てから言う事だと思います。

13:4 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。

13:5 不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。

13:6 不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

13:7 そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

13:8 愛はいつまでも絶えることがない。

これは私たちがこうで泣ければ二流だ、失格だ、規格外の不良品だと責めるための難しい、いらだたしい神様のルールではありません。これは神様のルールを守れない、弱い私たちへの神様の愛なのです。

そんな弱い、弱い癖に生意気ばかりは天下一品の私たちに対して、そんな反逆の人間に対しても、変わらずに施してくださる神様の愛なのです。

13:4 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。

13:5 不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。

13:6 不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

13:7 そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

13:8 愛はいつまでも絶えることがない。

ガラテヤ 6:14 しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。

6:15 割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。

新しくされること！！イエス様と共に死に、イエス様と共によみがえりの新しいいのちに生かされるということ！！

私がこれだけ知っているとか、異言が語れるとか、天使の言葉さえ分かるとか、どんなに上手に神の言葉を解説できるとか、あらゆる億義とあらゆる知識に通じているとか、学識豊かだとか、博士だとか、祭司長だとか、理事長だとか、大牧師だとか、肩書があるとか、山を動かせたとしても、自分の身を差し出しても、「主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名に

よって多くの力あるわざを行ったではありませんか」と言おうとも、本当に残念ながら、的を外しているのです。「やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じ、無に等しく、いっさいは無益」なのです。

しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。

13:9 なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。

13:10 全きものが来る時には、部分的なものはすたれる。

13:11 わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった。

幼子の時考えていたこと。素晴らしくきよい、崇高なことも考えていたかもしれませんが、非現実的なことも多かったものと思います。幼稚で稚拙で、安易で、道理に合わないもろもろの考え方があったものと思います。やがて大人になって行けばその考えを捨てて現実的に、間違いのない、充実した、すがり、自分の将来を預けることの出来る、発展する考えや理念に花開くのです。苦勞もして、失敗もして、自分の多くの経験の中から編み出した理念や思想を、あの小さなころの稚拙な考えに変えようと思うのでしょうか。部分的で、広い視野を持たず、全き、完全なものとは言えなかったのです。ですから、私たちは大人になるにつれ、かつて持っていた考えを発展的に解消していくのです。

そしてそれが今私たちに求められていることなのです。

人々の言葉や御使たちの言葉を語っていた。しかしそれは愛のない、部分的なものだった。それは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じだった。

わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、愛がない、部分的で不完全なものだった。そうであれば、わたしは無に等しかった。

たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益であった。しかし今は大人になり、完全なものを知るようになった。

13:10 全きものが来る時には、部分的なものはすたれる。

13:11 わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなった今は、幼な子らしいことを捨ててしまっ



た。

13:12 わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。

13:13 このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。

2000年前に造られた鏡と、今私たちが手にしている鏡を同じ鏡として見ることはできません。かつての鏡とは、石か、金属か、つやつやしたものを磨いて磨いて、なんとなく、ぼんやりと形を反映させるのみで、はっきりした姿を伝えることはできなかったと思います。明鏡止水とは言いますが、水面ほどに私たちに色付きのはっきりとした像を届けるものはなかったのではないのでしょうか。

そのように、古い鏡に物事を移すように定かならない、薄暗い、おぼろげであいまいな理解、稚拙な理解、部分的な理解であったものが、神様と顔と顔を合わせてはっきりと、何も差しはさまずにくっきりと直接見るように理解するというのが御国での出来事かとは思いますが、イエス様のことを考える時に、私たちに愛が分かり、神様の愛が分かれば、私たちの考えも、行動もおのずから成熟したものに代わるのではないのでしょうか。神様がイエス様によって現わしてくださった神様の愛のこもった言葉、教え、奥義、信仰、行いこそが成熟した素晴らしいものであり、そこには「わたしがこんなに努力したのに」とか、「こんなに頑張ってもよいことをしたのに」「こんなに学識豊かなのに」というものは存在せず、ただただ「神様、こんなに粗末な私に目を留めてくださり、ありがとうございます」という世界があるのです。この神様の愛からの感動と感謝からおのずと生まれ出るものを私たちは大切にしていきたいと願うのです。

ヘブル 5:12 あなたがたは、久しい以前からすでに教師となっているはずなのに、もう一度神の言の初歩を、人から手ほどきしてもらわねばならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要としている。

5:13 すべて乳を飲んでいる者は、幼な子なのだから、義の言葉を味わうことができない。

5:14 しかし、堅い食物は、善悪を見わける感覚を実際に働かせて訓練された成人の取るべきものである。

1 ヨハネ 4:7 愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている。

4:8 愛さない者は、神を知らない。神は愛である。

4:9 神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さっ

た。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。

4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。

4:11 愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。

4:12 神を見た者は、まだひとりもない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。

13:13 このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である。

これがいつまでも存続するものです。決して絶えず、滅びないものです。私たちはイエス様にある神様の愛によっていつまでも希望を持つことが出来ます。この神様なのでいつまでも信じ続けることが出来ます。この神様の愛は最も価値のある大いなるものであって、いつまでも存続し続け、いつまでも絶えることがないのです。ですから私たちもその神様の愛をまず心に据えて、すべてのことを考えたり、行ったりしたいと願うのです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。わたくしたちを不完全なもの、部分的なもの、おぼろげな、移ろいやすい、不確かな、幼稚なものの中に置くことなく、いつまでも残るものの中に置き、完全な知識のうちに、神様の愛のうちにつなぎとめていてくださいます御恵みに感謝いたします。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン